

# 隨泉寺寺報

平成17年(2005年)3月号 第415号

082-892-0217 <http://tetunari@ms1.megaegg.ne.jp>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会法座

講師 法性寺住職 高都持正文師

講題 「煩惱のままで」

『仰せに、ときどき懈怠することあるとき、往生すまじきかと疑ひなげくものあるべし。……かかる懈怠おほくなるものなれども、御たすけは治定なり』

蓮如上人御一代記聞書

どうも私は元来 横着者で、何かとめんどくさくなり、この新聞を書くにも一日一日延ばしてしまいます。気持ちはあるのですが、なかなか仕事はかどりません。惰性に流されてお尻に火がつかないと事が運びません。勉強もしたい、前向きにやりたいという気持ちはあるのですが、ついこのんびりと構えてしまい無為な日々を過ごしてしまいます。こんなことでは申し訳ないという気持ちにさいなまれて、時々自分自身が情けなくなってしまう。蓮如上人はそれを見越して【そんな私だからほとけさまはほっておかない】とお示しく下さいました。

## 3月の法座予定

- 3月14日昼席午後1時より……春季彼岸会法座
- 3月14日昼席終わり次第……門信徒会監査
- 3月14日夜席午後7時半より……出張法座 井原集会所
- 3月15日朝席午前10時より……春季彼岸会法座
- 3月15日昼席午後1時より……春季彼岸会法座
- 3月15日昼席終わり次第……仏婦新旧役員会
- 3月26日午前9時より……土曜学校(子ども会)



## 彼岸会

彼岸会は『到彼岸』の意味とされます。すなわち現在、我々が住んでいるこの迷妄の世界は此岸(しがん)であり、仏菩薩の悟りの世界である彼岸に渡ることを目的とするのが彼岸会の仏教的な意味です。

『到彼岸』は原語のサンスクリット語(梵語)では、パーラミーターと言います。

春分・秋分の日に行われる彼岸会は、仏教的行事となる以前は日本人の農耕生活に深く根付いた行事であったと思われます。これは彼岸の中日は太陽が真東から出て真西に落ちることから西方浄土を思うに容易だからです。

此岸から彼岸へ、すなわち悟りの世界へと入るための六波羅密とは

1. 布施 財施(財を施すこと)・法施(真理を教えること)・無畏施(恐怖を取り除き安心を与えること)の三種
2. 持戒 戒律を守ること
3. 忍辱 にんにく・苦しさに絶えること
4. 精進 常に仏道を修するための努力をすること
5. 禅定 心を安定させること
6. 智慧 真理を見抜く力を身につけること

以上六つの徳目のことです。

彼岸会は春分の日を中日として前後3日間、計7日間にわたって営まれる法要ですが、仏教行事でありながらインドや中国には同じような行事が見当たりません。彼岸会は日本独特の仏教法会であるといえます。その始まりははっきりしたことが分からず聖徳太子が企画構想したものであるという説もあります。また平安時代、紫式部(むらさきしきぶ)という人の書いた「源氏物語(げんじものがたり)」という本の中には、「彼岸」の中日(春分の日)のことを「いとよきひ」と書かれ、平安時代のくらの高い人たちが、体をきれいにしてから、いろいろなねがいをするまつりの日であったことを、それとなく言っています。



## 御礼

- |       |        |        |          |           |
|-------|--------|--------|----------|-----------|
| 永代経懇志 | 金 参拾萬円 | 古川 精治殿 | 故 古川テルノ様 | 特別永代経志として |
| 永代経懇志 | 金 拾萬円  | 天野 静夫殿 | 故 天野千鶴江様 | 特別永代経志として |
| 門信徒会へ | 金 五萬円  | 古川 精治殿 | 故 古川テルノ様 | 香典返しとして   |
| 門信徒会へ | 金 五萬円  | 植木 茂殿  | 故 植木 富恵様 | 香典返しとして   |
| 特別懇志  | 金 貳拾萬円 | 古川 猛殿  | (川崎市)    |           |
| 特別懇志  | 金 貳拾萬円 | 古川 紀江殿 | (川崎市)    |           |